

天狗のまな板石 (奈良)

むかし、ある高い山の頂上に天狗がすんでいました。

あるとき、村の男の人が山を歩いていました。ちょうど頂上まで来かかると、天狗があらわれて、

「おい、おれの碁の相手をしないか」とさそいました。緋衣をまとつた、赤い高い鼻の大きな天狗です。男は、恐ろしくてことわれず、碁の相手をしました。

天狗はとても強くて、男は負けてばかりです。天狗は、

「おまえ、弱いなあ。もうすこし強くなれよなあ」といいます。けれども、打つても打つても、男が負けます。負けると腹がたつて、恐いのもわすれて、

「もう一番」

「もう一番」と、意地になつて碁を打つていました。

けれども、そのうち、いちど家に帰ろうと思いました。

男が山を下つて家のそばまで帰つてくると、家におおぜいの人気が集まつているのが見えました。そして、和尚さんが、鐘をコーンコーンとたたきながら、念佛をあげています。男が、

「なにしてるんだ」とたずねると、家人が、

「うちの主人が死んで、三十五日の法事をしていません」といいながら出てきました。そして、ひょっと男の顔を見ると、死んだはずの主人ではありませんか。家人は、びっくりして、

「あんた、いつたいどうしたんだい」とさげびました。男は、まるできつねにつままれたようです。

「おれは、山へ行って、今まで天狗と碁を打つてたんだぞ」

いつの間にやら、三十五日たつてしまつていたのでした。

その山の頂上には、今でも、天狗が碁を打つた石があります。まな板石といって、大きなまつ白い平たい石です。